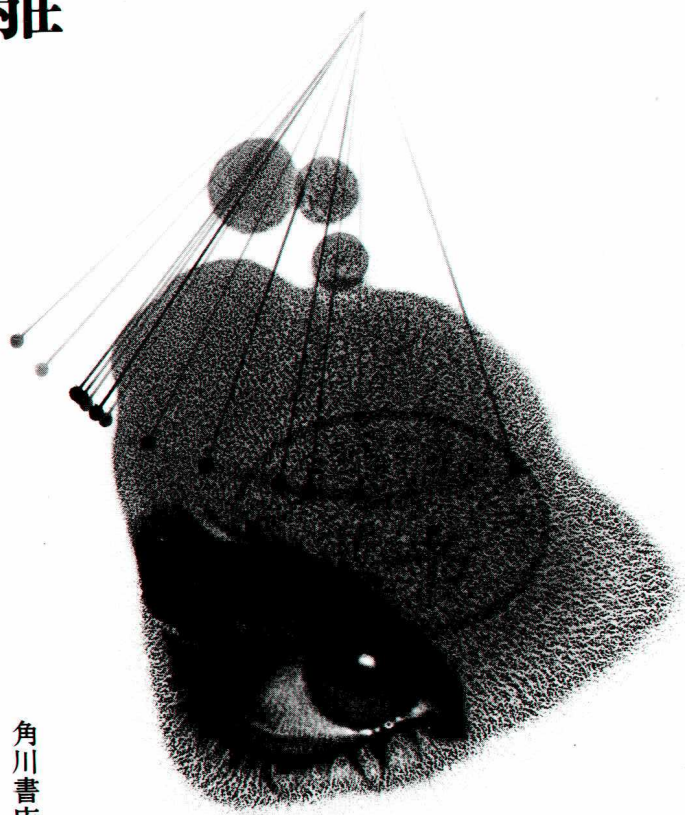


雪の別離

夏樹静子

樹静子の 別離



角川書店



雪の別離

昭和五十六年二月十日 初版発行

著 者 夏 樹 静 子

発 行 者 角 川 春 樹

印 刷 者 橋 本 伝 四 郎

製 本 者 大 口 英 一

発 行 所 株式 会社 角 川 書 店

東京都千代田区富士見二の二三
●東京③一九五二〇八●一〇二
電話〇三(二六五)七二二(代表)

Printed in Japan

新興印刷・大口製本

0093-872296-0946(0)

目次

雪の別離	三
モンタージュ	五
偽りの凶器	七
死体さえあれば	七
睡魔	二七
最悪のチャンス	二九
自殺前	二七
天人教殺人事件	二〇

装
丁
三
尾
公
三

雪の別離

1

遠いベルが夢うつつの意識へ忍びこみ、つぎには耳の奥で鋭く鳴り響いた。雅子^{まさこ}は眉をしかめて、目を開けた。

ツインベッドが二つ並んだ寝室には、ナイトランプのか弱い光が漂っている。

電話が鳴っている。せっかくまどろみかけていたのに……つい今しがた寝入ったばかりという感じが、眠さの残る頭の芯^{しん}にからみついている。

夫が出先から、まだ当分遅くなるというために掛けてきたのかもしれない。たまに思い出したように、そんなことを断ってくる時もあるから。

雅子はベッドから両足をおろし、サイドボードの上にある電話機へ手をのばした。寒いので、もう片方の手でガウンを引き寄せた。今夜は冷えこんでいるのかしら。ベッドへ入る時に暖房を止めたばかりなのに、もうこんなに空気が冷たくなっている……。

「もしもし」

少し不機嫌^{ふきげん}な雅子の声に対して、受話器の中はいつとき沈黙していた。それから、囁く^{ささや}ような声が呼びかけた。

「雅子ちゃん？」

あつと雅子は息をのんだ。

「卓也さん？」

「ああ」

一瞬に眠気が遠のき、代りにしみ透るような切なさ、雅子の胸にひろがった。

「今、いいの？」

卓也の声はまだ低く警戒的だ。

「いいのよ、今夜は。新年会でうんと遅くなるとかいつてたから、先に寝んでたところなの」

「起こしちゃったかな」

「いいえ、いいのよ」

雅子は力をこめていい返した。思いがけず卓也の声を聞いたうれしさを、精一杯伝えるように。

「いや、別に用事はなかったんだけどね。仕事が終わって一服したら、急に君と喋りたくなって

……遅すぎるので迷ったんだけど」

雅子の夫が不在とわかると、卓也もくつろいだように息をついた。

「じゃあ、今お仕事場にいるの」

「うむ。展覧会の準備もそろそろはじめなきゃならないし」

「そうね。個展まであとひと月半ですものね」

志野の若手陶芸家として頭角をあらわしている秋山卓也は、ここ三年続けて三月の雛祭りの季

節に、名古屋のデパートで個展を開いている。それは年ごとに評判を呼んで、無論今年も予定されていた。

一度だけ訪れた、多治見にある彼の工房が、雅子の眼に浮かんた。母屋から離れた小高い竹林の陰に建っていた白壁の簡素な建物。轆轤を据えてある土間の奥には、清潔な座敷があり、その広い机でデザインや下絵を描くと彼は語っていた。机の上には電話機も置いてあったから、彼は今あそこに座って、受話器を当てるのにちがいない。妻や娘たちとは隔絶された、彼ひとりの静謐の中で――。

「逢いたいわ」

思わず熱い溜息が洩れた。

「ああ、ぼくも逢いたい」

卓也も感情を押し伏せたような声でいったが、すぐ快活に、

「十日には逢えるじゃないか」

「あと三日も、待ちきれないみたい」

「暮れからずっと別れていたことを思えば、もう少しの辛抱だよ」

「ほんとにつらかったわ。急に車拾って、あなたのところへ行ってしまったおうと思った時が何度あったか……おせち料理を作りながら、知らぬ間に泣きじゃくっていたりして……」

名古屋と多治見とに別々の家庭を持つ雅子と卓也は、年末年始にはひそかなデートも断念しなければならぬ。そして二人が結ばれてからは、今度が最初の正月だった。

「十日の場所は、わかってるね」

また涙ぐみそうな雅子の気配を察してか、卓也はわざと事務的にいう。

「鳥羽の、“わらじ屋”でしたわね」

「うむ、名古屋を十時の近鉄特急に乗れば、十一時半には鳥羽に着くから……」

正月あけには鳥羽で逢おうと卓也が提案したのは、暮れの二十六日に彦根までドライブして、二人きりの忘年会をした帰りだった。卓也の仕事場は多治見だが、名古屋の繁華街のビルには、師匠に当たる坂西久平や卓也の作品を常時展示している店があって、事務所代りにもなっている。急行で三十分の多治見から、卓也は常時名古屋へ出てきている。が、国際展で入賞したり、作品の評価が上るにつれて、テレビ出演や雑誌のグラビアに撮られる機会なども増え、卓也の顔は世間に憶えられてきた。人目を憚る彼は、ことに知人の多い名古屋を避けて、なるべく静かな地方の町で逢引きすることを望んだ。

「あなたは？」

「ぼくも電車で行こうと思ってる。一つ用足しがあるから、一時まえになるかもしれないけど」

「旅館で待ってるのね」

「そう長くは待たせないよ」

名古屋から同じ電車に乗れるのなら……と雅子は思ったが、そんな無理はいえないのだ。雅子にしても、夫は代々の非鉄金属問屋を継ぐ旧家の次男坊だけに、知合いも多いのである。

「高橋、だったかしら」

「うむ、その名で予約してある。——じゃあ、きつとね」

卓也のほうから念を押した声の強さが、雅子の心を温めてくれた。

受話器を置くと、その上に両手をのせたまま、息をひそめていた。甘い切なさが再び身内を満たし、すぐには周囲の現実に戻れずに、しばらくぼんやりしていた。

肩から背筋に寒さを覚えて、雅子は身動きした。ガウンは膝に置いたままで話していたのだ。

本当に今夜は雪でも降るのかしら。——つと、枕元のデジタルに目をやった雅子は、「あら」と小さな声を洩らした。赤い数字が一時十五分を示している。もうこんな時間だったのか。さっきベッドへ入ったのは十一前で、ちょっとまどろんだだけのように感じていたが、一眠りしていたわけなのだ。部屋が冷えていたのも当り前だった。

雅子はベッドの縁にガウンを掛けて、布団へもぐりこんだ。

夫はまだどこかのクラブで飲んでいるのだろうか。卓也との電話中に夫が帰ってこなくてよかったと、今さらホッとする。仕事柄付き合いの多い彼は、帰宅が深夜になる日もざらで、遅くなれば雅子が先に寝む習慣がついていた。

毛布の下で目をつぶると、卓也の声が甦ってきた。高鳴っている胸を両手で押さえるようにして、彼の存在感を全身で抱きしめる……。

夜中にひとり残された人妻の孤独が、今の雅子には幸いだった。

待ちかねた日は、朝から灰色の雲が垂れこめて、今にも白いものが落ちてきそうな空模様になった。

「今日は午後から大阪へ行くので、帰りは最終になるかもしれないな」

夫はそういつて玄関へ出た。毎月十日前後には、大阪にあるメーカーの本社へ出向くことを、雅子は知っていた。

「いつてらっしゃい」

雅子は、肩幅の広いがっしりとした後姿がドアの向うへ消えるまで見送り、まだその場に佇んで、ガレージから聞こえる物音に耳をそば立てていた。夫の盛永秀次は、父から引き継いで兄が社長をしている非鉄金属問屋の専務を務めている。毎朝八時十五分に自分で車を運転して会社へ向かう習慣が、もう二十年以上も続いているらしい。らしいというのは、それが雅子と結婚する以前からのことだからだ。秀次は今年四十二歳で、六つ年下の雅子は、短大を出た翌年の二十一歳で彼と見合結婚した。秀次は若いころから成熟した感じの寡黙な夫で、十四年余りが平穩に流れた。昨年の早春、雅子が卓也と出遇うまでは。——いや、嵐が起きているのは雅子の胸のうちだけで、表面上にせよ夫婦の生活にはまだ何の波風も立ってはいないのだが。

夫の車が門を出ていくのを、エンジンの響きで確かめてから、雅子は廊下を駆け戻った。朝食

の皿をあらまし台所へ運んだだけで、寢室の隣の更衣室へ入って、鏡台の前にすわった。化粧をはじめながら、服のことを考えている。初春らしく梅の模様の友禪を着るつもりだったけれど、雪でも降りそうな今朝の空を見てからは、洋服にしようかと迷いはじめている。いや、本当は天候のためではなく、半月ぶりで逢う卓也の目に、どんな姿がいちばん新鮮に映るだろうかと、決めかねているのだった。

結局、ローズ色のワンピースにサファイア・ミンクのハーフコートを羽織った雅子は、九時二十分に家を出た。名古屋駅を十時の特急に乗るのには、ギリギリの時刻になった。気忙しく玄関に鍵を掛ける。家はかなりの広さだが、子供がいない夫婦二人暮らしだった。

ボーチの階段をおりかけた時、石塀の中途に嵌めこんであるメールボックスの中の白い封筒に気がついた。今朝新聞を出す時にもチラリと目に入っただが、広告のダイレクトメールか何かかと思っていた。が、よく見ると、速達の朱印が捺されているようだ。

雅子は封筒を取り出し、歩きながら表書きを見た。この家の住所と雅子の名前が不自然なほど角張った文字で記されていた。裏は、封のところに「メ」が書いてあるだけだ。雅子はちょっと首を傾げたが、ひとまずコートのポケットへ押しこんで歩き続けた。車を拾うほうが先決だ。

地下鉄の駅前に駐っていたタクシーが、名古屋駅の方向へ走りはじめてから、雅子はポケットからさっきの手紙を出して、封を切った。中身は便箋一枚。表書きと同じ角張った文字で――
へ秋山と付合うのはやめろ。必ず悪いことが起こる。あの男もいざとなれば、家庭が大事なのだ。恐ろしい不幸が起きるぞ。

雅子は反射的に手紙を伏せ、目をつぶって顔をそむけた。心臓が激しく搏っている。誰がこんな厭がらせを——？

無性に怒りがこみあげてきて、雅子は無意識に手紙へ目を戻した。

ボールペンの筆跡には、まったく見覚えがなかった。筆跡をごまかして書いているのかもしれない。

封筒を見直す。消印は〈名古屋中央〉で、一昨日の午後六時から十二時のスタンプが捺されている。速達なので、あるいは昨夜のうちに投げこまれていたのかもしれない。

雅子は二重のショックを受けていた。卓也との関係を誰かに知られている。その上でこんな脅迫めいた手紙が送られてきたのだ。

(誰だろう?)

自分の側から外部に洩れたとは考えられなかった。家族は夫だけで、あの人はほとんど家にいないし、残された妻の生活など忖度するようなタイプではないのだ。ほかにお茶やゴルフをしている女友だちのグループはあるが、彼女らに自分の内面を気取られるようなことは絶対になかったはずと、雅子には確信が持てた。

卓也のほうから漏洩したのにちがいない。彼は付き合いが広いし、顔も売れている。だからこそ、人目を避けることにあれほど神経を碎いていたのに……。

“敵”の正体が皆目見当がつかないだけに、雅子はいっそう悪寒のような恐怖に包まれる。

手紙の文面も、簡単だが、雅子の心の奥底まで突き刺すものだった。

へあの男もいざとなれば、家庭が大事なのだ……

やっぱりそうだろうか。あれほど狂おしく情熱的に雅子を需める卓也も、もしどちらかを選べといわれたら、雅子よりも、妻と今年新入学の可愛い盛りの娘を択るのだろうか……？

そこまでいくと、雅子はたじろぐのだ。だから、口に出して卓也を問いつめる勇氣もなかった。卓也にしても、それは同じであつたかもしれない。夫との恵まれた生活と、ぼくと、どちらが大切かなどと、彼は一度も尋ねたりはしなかった。互に追いつめず、避けて通ってきたのかもわからない。

それだけに、心の奥のいちばん弱い部分を抉られたように、雅子は傷ついていた。

（そうね、やっぱりそうかもしれない。だって卓也の奥さまは……）

「名古屋駅は、新幹線ですか」

運転手の声で、雅子はわれに返つた。車はいつの間にか繁華街に出て、駅前前の噴水が寒そうに見える。

「いえ、近鉄のほうへ……」

伊勢志摩の方面へ向かう近鉄のホームは、思ったよりすいていた。もう正月休みも終わったわけなのだ。雅子はそれとなく卓也の姿を捜したが、やはり見当らなかつた。電車が入ると一人で乗り、隅のシートに腰かけた。

名古屋の市街地を抜けると、畑と農家の散在する近郊の風景に変わった。どんよりとした曇り空の下に、冬枯れの休耕地が続いている。天候のせいばかりでなく、今は花や緑の少い寂しい季節

なのだろう。いや、どんな天気の日でも、卓也に逢う前なら、雨や風さえも心を潤してくれるように感じるものだったが……今の雅子の目には、ほとんど何も映ってはいなかった。

（あの人の妻は坂西久平の一人娘なのだから……）

卓也は美術大学を卒業したあと、志野焼の巨匠坂西久平に弟子入りし、彼に見込まれてめきめき頭角をあらわした。まだ三十八歳の若さで、数々の賞を与えられ、有望な若手作家として華やかな脚光を浴びているのは、無論卓也の才能もさりながら、義父の後楯が大きく物をいっていることは否めないだろう。師匠に背いても独り立ちしてやっていけるほど、卓也の地位は固まっているかどうか……？

とすれば、彼にとって、妻と雅子とどちらがかげがえのない存在か、おのずと答えは明らかではないか？

雅子は窓に向かって、ゆっくりといく度も首を横に振った。世間の常識はどうであれ、雅子の本能は理屈抜きで卓也を信じようとしていた。あの男は、心にもない愛を口にできる人ではない……！

近鉄電車は、紀伊半島の東岸を伊勢湾に沿って南下していく。車窓に海が近づくと、間もなく鳥羽だった。

フェリー埠頭と水族館の見える駅前に降りて、雅子はタクシーを拾った。

「わらじ屋」

卓也から道順も教えられていたが、運転手は了解したように頷いてスタートした。街から一軒